慶長以来 新刀辨疑 追加 九

新刀辨疑卷之九索引

新刀辨疑巻之九

刃長一尺一分

角字

以南蛮鐵於武州江戸 越前康継

本多飛驒守 成重所持内

康継ハ氏藏越前安所ヨリ来テ以初代殊ニ上手其家数代連綿す

角棒樋ヤスリ筋違ヨクタチ

金象眼

長曽祢興里

寛文元年八月七日

山野加右衛門永久（花押）

貳ツ胴截断

刃長二尺四寸

此新刀ハ興里仕手の銘也続至て剛く大乱文坂倉照包ヵ双文
のかくや老後延宝の住より八勝れ多る物多し

長曽祢虎徹入道興里
之作
ヒラ作リ
表 劔 梵字
ウラ 四寸余樋

上野介源吉正

吉正ハ武州住也銘ハ康継弟慶長常光ヵ久初代の是之一
大和守安定此吉正等勝れたる上手なり

紀州住千子正重
角ムネ
千子と切し
初代なるよし上手也

三河國兼継
ウラ
萬治元年八月日

駿府安西住貞國
小肉アリ
兼継貞國共ニ大体の工寿見寸法安在とハ備聞の謡也

〆無定

寛文八陸奥會津初代なるべし奥の和泉なるよふ劣る人気あり

祖十代信國ハ筑紫住信國末裔

平四郎吉政孫新藤次郎左衛門國義門人也或國義か信國ハ兄弟にて南部家の鍛冶と云一類皆上手也業物ハ劣れり

大坂初代大和守吉道門人陸奥國宇多中村住り重花丁子及上手也或ハ土佐の吉國吉成ハ父といふ

津軽の工也相州繁広門人なるべし大躰の作なり

盛永ハ甲斐府中住後藤右衛門と号江戸にも住り其系図奥の盛永下総守金英河内守英俊相模守盛安ハ大村加卜の門人盛安ハ相模守盛長ハ相模守盛永享保中の工也

或ハ慶長中關より甲斐府中へ移るとぞ

加州住藤原廣義

小肉

廣義ハ寛永頃の工とミゆ末の二王の如し上手也

越前國武蔵大掾藤原康永

角ム子

康永ハ康継一門なり至て上手ならぬ也

伯耆守藤原信高

小肉

尾張初代の銘や末の青江の如く至てよく見ゆる

来道孝

角ム子

先切

京近國の工なれバ延寶頃と見ゆ上手とハあらず次

横上野大掾藤原祐定

角ム子

ウラ

備州長船住

永正中の与三左衛門

以来の上手にて宗光勝光に劣る見ゆ中心見ての成をいふ也

長州住藤原廣[illegible]

角ム子

但馬國法城寺橘正則
但馬国出石領弘原住寛永中の工也備中守橘貞重
雲州住大明京
大明京ハ出雲国松江住高森源九郎國重也
越前守助廣
万治元年八月日
津田近江守助直
刃長二尺三寸五分
以南蠻鐵作之

若狭守源廣政

廣政ハ是作之多の子孫ニ掛し其出来ハ助直が劣ると

摂州住廣貫

廣義ハ大坂津田助廣門人

或ハ河内守三代目六之丞か実父ともいふ地鉄細か白ひ涼く上手也

亦集ヨ中心ともに近江守刀を見る由ハ実子出ル

大和守源廣近

廣近ハ陸奥國中村相馬家

の鍛冶ニて伏見右衛門尉と号す大坂津田越前守助廣か門人也

此作地鉄細ニ剛く荒沸小沸鮮ニ白ひ涼く大乱又ハ津田助廣の如く濤瀾乱ハ井上和泉守國貞或ハ加賀守貞則ニ見ゆ

上手也但シ久ハ此作世ニ稀也二代めハ五右衛門重次と云此作ハ未見

近江守藤原朝臣忠縄作

ウラ 於摂州大坂鍛之

河内守藤原國助

ウラ 慶安元年卯月吉日

近江守忠綱河内守國助か初代の銘也しき然出ル

越後守包貞

初代包貞也

小肉

○摂州住照包

言之進照包は包貞の後の名也 播州にて造れる身の銘あらん

○摂州大坂住丹波守吉道

ウラ 慶安四暦二月日南蛮鉄以作之

大坂丹波守初代の銘此刀纔見えしけれ

○丹後守藤原来直道作

角ム子

角ム子 刃長二尺五寸三分

スタレ大出来ツヨミ

ウラ ○ 一

延寶弐年五月吉日

○三品丹後守直道

ウラ○ 於摂州以南蛮鐵鍛之

延寶七年二月日

角ム子

○三品但馬守藤原宗次

ウラ○ 寛延二年八月日

於大江岸作之

宗次三代宗光も大小あれ也

肥前国忠吉

忠吉埋忠明寿弟子

角ム子

ウラ　切物明寿作

表矛蓮基裏梵字三蓮基

往年無師ぶ南化有之此忠吉明寿弟子の文ニ信し遺ぬ
天明元年巳三月ニ安播河村氏一刀を也ニ正銘無疑合之
故ニ丑年伊勢国津藩武田氏の一刀を模して将覧ニ便す

大隅掾藤原正弘

小肉

地鉄ゐて剛く鍛理帽子尖るなり之

刃長一尺二寸七分
幅一寸二分七重
カサネ二分八重

越州住政國

角ム子

政國ハ淺柔ヨ也ラ如此の銘も有之

南部住金房兵衛尉政次

小肉

政次ハ地鉄劉く堀川物の如く匂縵理にて寿舞元くる也

筑州住信國源正包

小肉アリ

正包ハ享保中江府へ来りて鍛ひしもの有地合匂ふ縫白ひ有之上々作也

尾陽住清水甚之進信直

ウラ 天明九年三月吉日

小肉

信直ハ尾張國伯耆守門人地鉄匂よ鋭白ひ有て上手とはいふべし

備中松山臣武藤兼常

ウラ 寛政元年八月日鍛

小尻丸ム子

兼常ハ美濃國関住人にて森次郎太郎ヶ末也元明ハ自身来て鍛冶乃法を問ふ志の厚きを感して微意を示す其言を用ひて一助を得たり元祖擢す長尾元長の薦にて備中國松山の鍛工と成地鉄匂ふ縫白ひ有て上手也関住兼常と計も切也

前の國作二刀出る守を云仍争有之故に惜哉不便也

正房ハ伊豆守になり末と云
元武元直も守に同し

初代ウラニ延寶五丁巳洛陽住二村左衛門尉住陸奥守の此切

正久久次兄弟ハ肥前國平戸の住人正久ハ埋忠傳を學久次ハ埋忠漱多宗と
号ハ初ハ今の土肥真了か門人第一が故ありて義絶し肥後の松村
某刀鍛冶を鍛ふるも好む仍て正久兄弟松村氏に寄て鍛錬ハ此識細に
並流白ハ肴も薩州正良に似たり兄弟同位の上手也

東肥松村昌直

講武之暇爲湯地遠明造之

天明八年八月

或ハ 講武之暇造之

寛政元年己酉二月

松村昌直ハ肥後國藩世禄の士にして朝に淬き夕に衛ふの冶工に非す太
平の武恩に浴して天の飛靈に鍛する志事に同して膽文に云らしめし其
作薩摩刀を模すといへとも正清安代等の風にして上り凡と絶くの
藝師として求むるハ名実の違ハさるを擇ひ學ひし志ハあれと鍛冶の技共に
あらすして久しく當時師と為へき者をいふ然れハ古の上工の他を

相もて是を師として學ふに志すあれハ備前友成則宗助宗長光粟田口
國友久國吉光國吉國綱相州正宗貞宗江義弘の風こそ慕ハし
長船盛光康光等又近世にてハ堀川國廣津田助廣井上真改の處を
傚ても幸と云へし古昔の名工にハ容易に及ふへからすと錬る所
ならす時ハ其及ぶも又近からん見る未卑き時ハ其及ぶ所も遠からん薩摩刀
の如きハ下工等ハ伺ふされとも古の名工に及ハさる所も遠し古備前
粟田口来相及び濃等を的として佐を盛光康光國廣助廣真改等より
薩摩刀の必要あることを知りて短を捨長をとりて鍛錬工夫を積ミ
あらハとも古の名工の域に至るへき也今数千百人の鍛工國廣等を設
助廣以下の下に屈し正清安代正良元平の上に出る者少なきハ
志の高からさると上鍛を為さるなりと為すへし志一ならん冶工も
古の名工を目當にしてんをへきるも昌直ハ暴に來て刀鍛の

と問尋しよりて一志の添さとなりて予も又発見の意を述るとの
やまうし國廣真改の粗沸助廣の大亀文ハ正鵠に為よあらん
況や今の薩刀ハ以下に於てをや

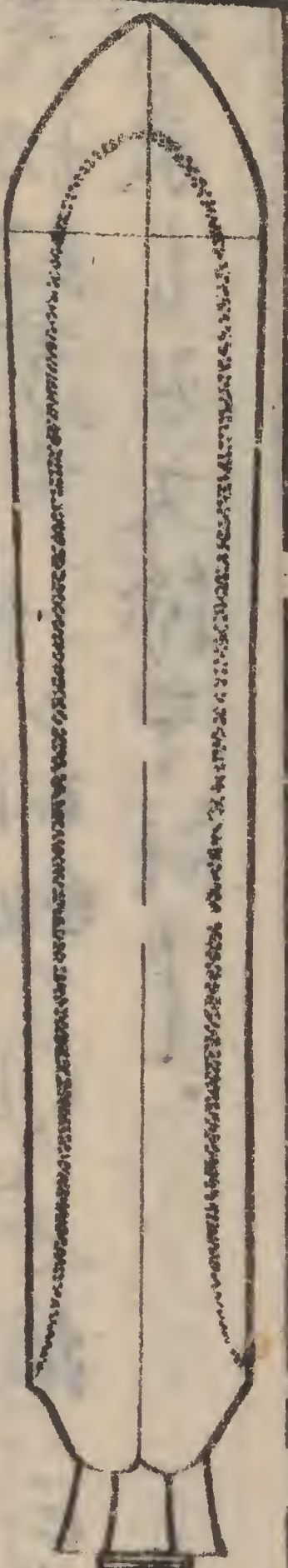
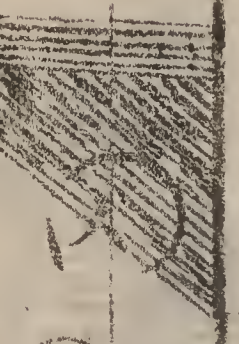
延壽國昌作
ウラ　天明六年二月
小九ム子

國昌ハ延壽の末流也銘よ薩刀の如く純有て上手也

延壽國村末孫國秀作
ウラ　寛政二年八月日
田ム子

國秀ハ右國昌か倅亦同し

氏貞ハ肥後の鎗工也格好揃ひ肉置よくして上手也

肥州住氏貞
ウラ　天明八年五月吉日

東肥後藤昌廣
ウラ　寛政三年八月
田ム子
肥後國松村昌直門人此任師同

松村昌直門人作右同
九ム子
寛政三年二月

魚妙田男二郎ハ孫悳真鍛刀銘久真と銘す多く不造也

彦坂紹芳士ハ予か桐鍛の門人也鍛ハ正秀ニ寄まろ其出来も刄文締て能し

正繁ハ播磨國姫路の産大和大掾氏重末葉手柄山朝七と号ス摂州大坂ニ住し手柄山氏繁と銘ス天明中年陸奥國白川の藩士長尾元長か奉ホして彼藩の鍛工と成故今の銘ハ中心ハ圖のごとく武士の字白川家士と銘ス地鐵細ニ荒錵匂ひ有て大亀文縵理いろく有皆宜切れもよし黒用ひる工手多く彫物も上手也

九ム子

遠江國横須賀住三秀

ウラ　寛政元年八月日

三秀ハ遠江国横須賀住人也て西尾家の鍛冶中塚八蔵と号し正秀門人也其他地鐵刃ふ至るまで他のことく何れも銘有て大亀文を好
正秀ニ不劣上手なり

九ム子

土陽住國道

國道ハ土佐の吉國嫡子上野大掾國益ハ山口示右衛門と号本ハ木村氏
延宝二年木村し改養子久国也上野大掾と任今ハ國益ハ江戸
正秀門人木村久右衛門と号作ハ正秀と似たり

大四分子

美作住山城下藤兼先

天明七年八月日

兼先ハ美作の工數代相続し川村五郎右衛門と号猿理上手也

山ム子

阿州士近藤宗利

阿波國近藤五一郎と号正秀門人之又石川与孫四郎と号猪相見え候

従五位上榊原源長良

原中良ト切り小刀モ同作也

或下總國良川人氏正秀門人と云
山ム子
○於東都結城正武作之
正武ハと寛政の鍛冶並常將應と同し
田ム子ヒクシ
東武源將應
ウラ
寛政二年二月日
將應ハ江戸神田住世く鍛ヲせ業とし近年好んて
刀劒を造る志有鍛冶と云へし
峯肉置鉈同真改ニ同
○井上真改峯
大亀丈真改濤瀾ニ同し刀長二尺七寸八分半
按同人ナラン
○延寳三年二月日
小肉
○豊後國日出住石見守源吉盛
ウラ
○天明九年二月日
吉盛ハ豊後國日出木下家の鍛冶也天明六年丹波守吉道門人
となり受領す弟種盛壽兵助盛輝有其作未見

盛兄ハ豊後國日出石見守吉盛嫡子也父の命ニ随寛政二年来て愚息真鱗と共ニ鍛煉修行す石見守允なる故鍛冶允を呼吉廉と銘ス同五年春盛兄と改む弟鉄ニ郎盛利有

薩州住良明
ウラニ 天明元年

良明ヵ作今の正房ニ同しかるべし

丹波守輔吉道
角ム子
依於好今井右門三拾八遍折鍛之
寛政五年二月日

吉道ハ丹波守子藤蔵と号ス濱部寿格門人也明より吉格と銘し寛政二年父丹波守没して後吉道を銘ス

三品源直道造之
小肉ム子
寛政四壬子八月日

直道ハ濱部寿格門人佐多来と号ス初ハ寿格今寿道と銘ス

両作ウラノ方

○兄弟子為義

以藤原為継

此二人ハ正秀門人と云

ウラ

○正秀

○千刀之後

水心子当時の銘也

○秀國

ウノ

○寛政四年八月日

秀國ハ陸奥會津の工大八と号ス正秀門人也

内ム子

○兒玉常永作

兒玉常永ハ正秀同國の産にて彦坂氏の家士正秀門人也

角ム子

○刻物埋忠七左

裏

表

埋忠七左衛門ハ宗義と号す明寿五代の孫元禄宝永正徳鐔の上手也刀剱ハ吉信か同しからん歟

朝士保科氏所蔵物也

刃長二尺三寸六分

國安

此刀無銘ニ金象眼若狭國小濱藩中ニ藏

今ハ角ムク子ニスリ

此鉡ハノチ

此鉡ハウフ

藤原國廣作
於釜山海湊

中心先キル

今刄長二尺三寸余

新刀銘盡後編ニ於釜山海湊作と銘せし國廣有と云も此説を聞とも未其物を見ス凡今辨疑増補を除て一刀并ニ刄を爰ニ図す

角ムク子

肥後守藤原廣辰

廣辰ハ後集ニ常陸守肥後守ニ人アリ此中心皆異也上手と云へり

洛陽堀川ニ住成廣造

ウラニ 慶長三年二月日

丸ムク子国安ノ如シ
金ツヨシ

成廣ハ今一刀并刄を堀川國廣國安等の風ニ而一門成へし上手也

丸棟

上野守菅原助包

角ムク子ノシノギ小銘多シ

大和守菅原国武

助包ハ二ノ巻九丁ニ國武同人辨疑板ニて又數刀と刄を土州吉行吉國ニ見る国武と二字銘多し

綏靖天皇ハ御宇天真浦ニ利我國鍛冶數千万工其名も正史不所見なし　文武天皇沼剃有てより以来天國神息等造る物ニ其名も記すことなく成て其匠と好をも分別なし下工ハ其名記すハなしと見元正天皇御宇養老頃ニ紫　桓武天皇御宇延暦間ハ天國一門神息等あらし其銘の位見えてニ利刀来世なして上工無ニあり醍醐朱雀村上冷泉圓融花山一条天皇御宇ハ上工殊ニ多く源満仲朝臣二刀を試て其鋭利を以て号を称しニ利屍まて斂試ることも出来れつ王

是中古ニ家の流風廃亡のうれといへ共既ニ刑し殺て再刑の意あり豈可不思哉

後鳥羽土御門順徳ハ皇法守文治建久建保承久の間ヶ
上工の多き世の始る所也並しなり四条後嵯峨後深草亀山
後宇多伏見花園後醍醐後村上天皇法守称光ハ皇御宇
應永の頃なり永禄元亀天正の間ハ鍛冶衰へて慶長頃より
万治寛文延宝天和貞享元禄ニ盛ありしハ宝永正徳享
保元文寛延宝暦明和の頃ニ又衰て殆海内鍛冶なきかことし文
安永天明寛政の今ニ及んて治世ニ長し皆上工ニハあら
ねとも鍛錬功積ありて軻遇突知埴山姫也聚るの域ニ
至れるもの有也候て今濫ニ判きあれ甲乙ハ後の判断

也候扨又古代の鍛冶ハ皆自ら麁砥中磨精磨迄まても
為せしなりハ式ふも見へて　後鳥羽ハ皇法守番鍛冶の磨
ハ皆鍛冶ニて古代の如くも北条氏の末足利家の始頃より
鍛冶の外ニ鋤磨工と号るもの出来たり然と見ゆ是ハ
鍛冶の中精磨の上工自然と出生する所を専ら業として
始を成しまより出て又鍛冶も研磨も為なして目利と
号して唯鍛冶の名を列し其上下の位を定るの也未て
又是ニつの事業ニして或曰刀剣ハ上下の代ニ寄らん肯月の
截るを善と為と也 或此楠正成の語と云へとも其正否ハ未詳 此語僭上驕奢也

禁し戒むるよりて捨へうるべしと云へとも實ハ屍に試ざること
異なるなし金善き劔ハ則上作也上作とハ物よく截る故
以て上作となす次ハ中也骨も物也相劔の要ハ鐵の善不を
知るに有鐵より利を知るよ利鈍ハ其中より有豈屍の堅軟
骨節の名目冬夏の異なる手裏の功拙刀劔の象形試の
數条甚紛紜如此を俟て而后相劔伸の益ありん不識
則有疑心可思哉

家君常に門弟子に教て曰新刀をおせんよりハ古刀
を則必ず求べし今所不得古刀ハ天國宗近を始として數多く
唯先備前粟田口也相新刀ハ助廣號第一とし其外
あまた有其次ハ出羽大掾國廣ハ其の數工なり
○門人問曰薩摩の正房ハ其名を告て後国様と云説を
なより信ぜざるかいへども先生故深くせんずハ家君答曰
其説勿廣をも告後に成たりといふいふに似てり其法未
聞の事なく數でし○一人問曰小林國輝數代あるやいなや
對て曰其家をもひ事ハいまだ即ちまで浪華に在て諸
を作るも其末也刀劔に至ては集る進一人あるもし
其々擧ば群蔦元其津田氏其若狭の近江を
ども刀劔を鍛て又終に其則が其る奥おかる

吾家武論大人之軍運或云長者子昭
稱一何以党學之為子孫好能生
學作衣為牧手集壱武家勤之曰學無
子之學也以之於天下史波字依為
讀之法皇世之務不亦復守何以君子
省老久之再之於吾曾不得之從

正是孫為以求世業長不云深不可力
得之孫世學不重不能當之而見
世書未學其有不知學者居足且萬可書之章
也不可學未知之法者為於乃生
而未知之有不學之志不可以故
國之學集及二集史小子能書法來

安政三丙辰季秋穀旦

十河長龍撰

鍾田生武鎔書

孝經大義頭書　全一冊　本朝鍛冶考　全十二冊

山陽詩鈔　賴先生著　全四冊　古刀銘盡大全　全九冊

山陽遺稿　同　全八冊　新刀辨疑　全九冊

四書集註鈔説　全十二冊　同　辨疑畧　小本　全一冊

鼇頭四書集註　文久補刻　全十冊　同　銘盡大全　全　彩色入　全一冊

和漢儒書經書神書佛書醫書歌書誹書連哥狂歌隨筆雜書其外繪本類數多法帖唐刻和刻數品御誂御藏板彫刻物并製本仕立入念出來總而格別下直ニ奉仕上候且御拂本成丈直段宜頂戴仕く

大坂書林

心齋橋通南久太郎町

河内屋德兵衛板